



Title	Dr. Franz Stuedtner 作成ガラススライドの意義について : 20世紀初頭の販売カタログから
Author(s)	和田, 積希
Citation	デザイン理論. 2016, 67, p. 84-85
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/56299">https://doi.org/10.18910/56299</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## Dr. Franz Stoedtner 作成ガラススライドの意義について

— 20世紀初頭の販売カタログから

和田積希／京都工芸繊維大学美術工芸資料館

京都工芸繊維大学美術工芸資料館には、現在約1,800枚のガラススライド（幻燈画）が収蔵されている。そのほとんどが同大学前身校である京都高等工芸学校が設立された1902年から1920年代にかけて、同校の図案教育の教材として購入されたもので、このうち約1,000枚は、1895年に Dr. Franz Stoedtner（以下博士、1870-1946）によってドイツのベルリンに設立された「学術用映写研究所 Institut für wissenschaftliche Projection」の製品である。博士は、ドイツで初めて学術的な利用を目的としたガラススライドの作成・販売を手がけた人物の一人であり、彼の作成したガラススライドのシリーズは、その販売カタログとともにドイツ国内の大学や美術館をはじめ、欧米の大学にも収蔵されている。本学同様に大学の教材として購入され、そのままアーカイブとして図書館や美術館に保存されたと考えられる。

当館所蔵のガラススライドのうち、最も古いのが、博士が作成した「幻燈画」として登録されている100枚である。これは1902年9月23日に京都高等工芸学校初代校長、中澤岩太が受入先となり購入したもので、同校は同年9月3日に開校しているため、ごく最初期の教材といえる。その後、このシリーズについては、「幻燈種板 ヨーロッパ美術史写真」という名称で1911年に622枚を、1912年に309枚を追加購入していて、スライドを映写するための幻燈機も収蔵されている。

博士は、フリードリヒ・ヴィルヘルム大学（現在のフンボルト大学ベルリン）に進学し、美術史教授であった Hermann Grimm（1828

-1901）の指導を受け、1895年に Hans Holbein についての研究で博士号を取得した。Grimm は当時ドイツで、美術作品の複製媒体として、写真の有効性を主張した人物で、自身の講義においても積極的に写真を利用しており、この影響を受けた博士がベルリンに設立したのが「学術用映写研究所」といえる。

自身がカメラマンでもあった博士は、おそらくすでにあつたネガからガラススライドを作成する一方で、ドイツを中心にヨーロッパやアフリカなどに大規模な撮影旅行に出かけてネガの収集をおこない、ガラススライドの充実に力を注いだ。その写真の数は、1898年頃には1万枚ほどであったが、1944年頃には、ネガにして約25万枚に及んでいたとされる。彼が特に力を入れたのはドイツにおける文化財の把握であった。当時あまり知られていなかった美術・工芸作品や建築物を撮影して、様々なシリーズを作成し、やがてその領域は、物理学、天文学など文化史以外の分野にまで及んでいる。

一方で1898年頃から販売用のカタログを発行し、教育・研究機関を中心にこのカタログを通じてガラススライドの注文が可能な体制作りをおこなった。最初期には『ガラススライドでみる古代美術 Die Antike Kunst in Lichtbildern』、『工芸と装飾に関するスライドカタログ Katalog von Lichtbildern über Kunstgewerbe und Dekoration』などが発行され、その後も、イタリアやドイツ美術に特化したカタログなど続々と発行された。

なお、『工芸と装飾に関するスライドカタログ』の目次をみると、第一項目として、装

飾、建物部分、室内装飾、家具と象牙細工、などのジャンル、次に、古代から中世、ロマネスク、ゴシック、ルネサンス、バロック、ロココ、ツォープなどの時代、最後に、国や地域で区分されている。ヨーロッパのものが圧倒的に多く、場合によってはアラビアやインド、ごく数点だが日本もあがっている。

最後に、当館が所蔵している博士作成のガラススライドの傾向と意義について考えてみたい。特に目を惹くのは20点あまりの、アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデやヴィクトール・オルタ、ルネ・ラリックなど同時代の建築家やデザイナーの作品が写されたガラススライドである。椅子や机、インテリア、室内装飾全体を写したのや装身具、装飾図案も含まれている。全体として地域や時代、ジャンルも幅広く、古代から近代にかけてじつに様々な美術品や建築物のガラススライドを購入しているが、やはり細部装飾と同時代のデザイン潮流に注目していた印象を受ける。このことは、これらのガラススライドが、図案科におけるデザインの参考資料であったことをうかがわせる。京都高等工芸学校では、ロートレックやシェレ、ゼツェッションなどのポスター、エミルミュラーやジョルナイなどの陶器類をはじめ、開校当初にじつに多くの実物資料が用意されたが、ガラススライドは、これらを補う役割をはたしていたと思われる。

また、トーマス・ハウフェ（藪亨翻訳）の『近代から現代までのデザイン史入門 1750-2000年』には有名なヴィクトール・オルタの「タッセル邸における〈吹き抜けの階段〉」（挿図）という図版が掲載されている。この出典は現在、博士の残した約20万枚のガラス・ネガを収蔵しているドイツのビルト・アーチーフ・フォト・マールブルクとなっており、さらに当館所蔵の画像とも構図が合うため、同一のものと考えられる。1900年前後

に撮影・販売された画像が、いまなお、デザイン史の視覚資料として使われていることは、博士のおこした事業の重要性を物語る。

このように、博士による一連のガラススライドは研究、教育に使用するというその目的から、現在でも使用可能な、質の高い写真であり、また、ドイツの文化財をはじめとして、あまり撮影対象になってこなかった今となつては貴重な建物や作品、さらにはヨーロッパ以外の様々な地域における文化財の写真であるという点で貴重であり、同時に教材として極めて価値の高いものである。

さらには、開校当初の京都高等工芸学校において、初代校長中澤岩太を中心とする初期教員陣がこうしたガラススライドの重要性と有効性を認識し、取り入れようとしていたことが分かるという点、また、その選ばれたスライドから、当時の京都高等工芸学校がどのような教育をめざしていたか、読みとるひとつの材料となるという意味でもたいへん貴重な資料といえる。

#### 参考文献

Haffner, Dorothee: "Die Kunstgeschichte ist ein technisches Fach." Bilder an der Wand, auf dem Schirm und im Netz., in Philine Helas, Maren Polte et al. Bild/Geschichte. Festschrift für Horst Bredekamp, pp. 119-129, Akademie Verlag GmbH, Berlin, 2007

